

## 資料2 里山を味わうためのプログラム開発

### —新しい観察会の可能性—

環境保全研究所では、年間を通じて「自然ふれあい講座」という一般向けの観察会を行っている。そのなかで、2001年4月から2005年10月まで継続して「里山歩き」シリーズを企画し、開催した。これは、県内各地のさまざまな里山を実際に歩きながら、地域を丸ごと観察し、味わい、里山の抱えるさまざまな課題を共有しようという試みで、県内の17箇所の里山で実施したものである。

#### 「里山歩き」のねらい

「里山歩き」シリーズの特徴と最大のねらいは、研究所の複数の専門担当と一緒に歩きながら、個別の対象だけに限定せずに、地域の自然や生活、歴史、文化をまるごと観察し、ともに体験するという点にあった。このねらいには、

- (1) 里山の魅力は、花や虫、石や川や道といった個別の対象だけにあるのではなく、それら相互の関連性にも大きな魅力を見つけることができること
- (2) 里山の環境保全を考えるばあい、総合的に地域をとらえる視点が不可欠であること

という里山研究プロジェクトの基本方針があり、またそのような地域のとらえ方そのものにも、観察会としての新たな可能性を見出したことによる。参考までに、私たちが企画した「里山歩き」の実際について簡単に紹介する。

#### 「里山歩き」の準備

里山の自然は人の暮らしを抜きにはできないが、暮らしを理解するには、土地の歴史を知ることがまず必要である。そのため準備段階から、複数のスタッフが協力して、ルート選びから観察ポイントの設定、観察会のねらいなどについて一緒に検討した。また、参加者が地域を理解するのに役立ててもらえるように、以下の簡易な資料をセットにして準備した（P.116～117の参考資料を参照）。

- ① 地域の歴史年表（地質時代から現代までの主な出来事）
- ② 見どころマップ（当日の観察ポイントの位置などを図示）
- ③ 主な見どころに関する簡単な解説

当日は、この資料を参加者に配布し、持ち帰っていただくようにした。

長野県は変化に富む地形や標高差、多様な気候条件、複雑な自然史や歴史をもっており、ひとくちに「里山」といっても、各地に多種多様な環境や文化が育まれている。次ページに示すように、県内17箇所の開催地では、地域ならではの様々な見どころやテーマが設定された。

#### 「里山歩き」の実際

当日は、参加者とともに4～5人のスタッフが一緒に里山を歩きながら、各観察ポイントで必要に応じて解説を行った。個々の対象について地元詳しく知っておられる方がいる場合は、事前に解説をお願いしたり、あるいは当日の参加者の中に地元の方が含まれていることがあり、観察をしながらそういう方に直接体験をうかがうこともあった。そして、現地でも地域の魅力や里山のこれからについて参加者同士による意見交換も行った。

自然ふれあい講座「里山歩き」の概要（2001年～2005年実施）

実施年月	場 所	主要な見どころ・テーマ	(主担当)
1回 2001年4月	旭山（長野市）	カタクリ群生、都市近郊の里山、長野盆地	（須賀）
2回 2001年10月	かつら山（長野市）	芋井の集落、戸隠道、飯縄信仰	（富樫）
3回 2001年11月	富倉峠（飯山市）	雪国の暮らしと自然、歴史の道	（浜田）
4回 2002年5月	千国街道（小谷村）	塩の道、雪国の自然、災害と暮らし	（富樫）
5回 2002年8月	飯盛山（南牧村）	草原と生き物、高原野菜、観光（清里）	（須賀）
6回 2002年10月	長峰山（明科町）	里山保全活動、フォッサマグナの大地形	（畑中）
7回 2003年4月	中綱湖～姫川源流（大町市・白馬村）	湖水と河川源流域の自然	（須賀）
8回 2003年5月	焼尾峠（天龍村・南信濃村）	秋葉道、南信州の自然と暮らし	（富樫）
9回 2003年9月	塩田平（上田市）	ため池、里山の変化、里山保全活動	（畑中）
10回 2003年10月	鳥居峠（木祖村・楢川村）	中山道、ドングリ調査、俳句会	（堀田）
11回 2004年5月	居谷里湿原（大町市）	湿原の花と昆虫、かつての湿原利用	（堀田）
12回 2004年9月	菅平高原（真田町）	湿原の動植物と人為改変	（須賀）
13回 2004年9月	伊那谷の段丘（伊那市）	段丘と自然、地下水利用、宿場町	（畑中）
14回 2004年10月	小泉山（茅野市）	里山の保全と利用、雄大な地形と地史	（富樫）
15回 2005年5月	飯綱高原（長野市）	高原の自然、里山変遷と多様な環境	（富樫）
16回 2005年7月	霧ヶ峰高原（諏訪市・下諏訪町）	高原の生き物と利用の歴史	（須賀）
17回 2005年10月	虫倉山麓（中条村）	かつての里山と里山の将来	（畑中）

参加者の募集人数は、毎回20名とした。この企画のねらいである「地域を知り、思いを共有すること」ができるためには、どうしてもこのくらいの規模に抑えることが必要であった。ルートには旧街道あり、柚（そま）道あり、登山道ありで、季節に応じた花や生き物たち、人の暮らしや民家、歴史的な景観、変化に富む地形や地質など、当日になって思いがけない発見や出会いもたくさんあった。

たとえば長野市旭山ではカタクリの見事な群生を楽しみ、善光寺平の大きな眺望の意味を考えた。また飯山市富倉峠では雪国の暮らしと富倉古道を訪ね、小谷村千国街道では塩の道のたたずまいのなかに野生ミツバチの巣を発見し、あるいは地すべりなどの災害と暮らしについての体験も伺った。南牧村飯盛山周辺では高原野菜の産地とフォッサマグナの物語を味わい、天龍村焼尾峠ではかつての秋葉道（為栗道）の自然と歴史を学んだ。そして明科町長峰山では、里山環境と市民による里山整備活動の様子をたずね、伊那市では段丘に特徴的な自然環境と暮らしの関わりを学び、飯綱高原や霧ヶ峰では信州の高原の自然や草原の意味をも考えた。



雪国の民家の特徴と暮らし（小谷村）



かつての秋葉道と炭焼き窯跡（天龍村）



小泉山山頂で里山談義（茅野市）



信州の里山としての高原の魅力（霧ヶ峰）

この里山歩きを通して、参加者の方々とともに企画をした私たち自身が、信州の里山はこんなにも多様で、たくさんの大事なものを持っているということを知ることができた。簡単にいえば、この「里山歩き」は、形としてはウォーキングに近く、内容としては「自然観察」と「郷土史探訪」を融合させたものであり、ともに自然や歴史や暮らしを見つめ、そのつながりや意味を味わうものといえる。

### 「里山歩き」の可能性

「里山歩き」のように、歴史と自然をいっしょに学ぶことには、1たす1の情報が5や10の発見にもつながる期待がある。郷土史が専門の方も、自然観察中心の方も、それぞれ各地で見学会を催しているが、これまで両者が一緒になる機会はあまりなかったように思われる。そうだとしたら、今後「里山歩き」のような形でそれらの方々がともに地域を歩くことで、新しい地域の宝がぞくぞくと発見されるかもしれない。

講座を通じて見えてきたのは、「(信州の)人の暮らしとともにある自然の魅力」である。ご紹介した「里山歩き」は、その魅力をどう引き出し、共に味わうかという実験でもあった。次頁以下に添付するのは、茅野市小泉山で行なった里山歩きのために用意した参加者に配布した資料の一部である。地域の宝の掘り起こしや地域の価値の再発見をしたい、あるいは独自のエコツーリズムの開発に取り組もうと考えておられる方に、すこしでも参考にしていただければ幸いである。


(富樫 均)



## 第14回 「里山歩き」で準備した資料（参考として一部を抜粋）

長野県環境保全研究所・小泉山体験の森創造委員会 共催  
2004年10月  
「自然ふれあい講座」資料

### 里山歩き南信編 ～小泉山再発見（茅野市）～



今日の観察ルート位置図（国土地理院1/25000地形図「茅野」を使用）


★主な観察ポイント★  
①中沢口 ②富士講社 ③狐の腰掛（輝緑岩）④船山  
⑤田道うえ付近のコナラ林 ⑥休憩所（展望）⑦小泉山頂上（アカマツ林）  
⑧富士浅間神社 ⑨参道と食行身祿座 ⑩粟沢口

案内役：富樫 均（地形・地質）、大塚孝一（植物）  
畑中健一郎（人文社会）以上環境保全研究所、  
小泉山体験の森創造委員会の方々

### 小泉山周辺の歴史年表（抜粋）

年代	おもな出来事
2500万～2000万年前	フォッサマグナの発生、陥没した一帯は海となる
700万～800万年前	輝緑岩、石英閃緑岩のマグマが地下に岩体を形成
130万年前～	八ヶ岳火山の活動
4000～6000年前頃	八ヶ岳山麓に縄文文化がさかえる
西暦100～300年頃	弥生後期には天竜川水系と千曲川水系の両文化の影響をうける
712年	「古事記」の中に諏訪神社祭神の建御名方神の国譲りの神話あり
1542年	武田信玄の軍によって上原城落城、諏訪惣領家滅亡
1582年	織田信忠の軍によって高遠城落城、武田氏滅亡
1620年	小泉山の富士浅間神社祭る
1733年	食行身祿富士山北口7合目で入定
江戸時代中後期	各種の講が盛ん
1860年	小泉山の富士講社再建立
1960年頃～	高度経済成長期に入りそれまでの里山利用が減少する
2002年～	小泉山体験の森創造委員会と茅野市による整備事業がはじまる
2004年10月17日	自然ふれあい講座「里山歩き」開催

(茅野市史などを参考)



### 小泉山体験の森創造委員会の活動

小泉山体験の森創造委員会のメンバーは、小泉山周辺の区民による10の部会と、3校の学校部会、森林組合、茅野市教育委員会・建設企画課・総合博物館などから構成されており、平成14年度（2002年）から3年計画で、小泉山の整備事業をおこなっている。

【活動内容】遊歩道整備、案内看板設置、展望のための除間伐、柳川周辺観水ゾーン整備、植栽、歴史や由来調査、パンフレットやハンドブックづくり、ピンバッヂづくり、自然観察登山など

【活動の特色】○里山を中心に、子どもから年配者までが一帯になって活動していること  
○地元住民、学校、教育委員会、森林組合など、異なる立場の人々による幅広い連携と協力のもとに活動していること  
○地域の自然や歴史や文化を大事にしながら、生涯学習、体験学習の場づくりから、里山の利用と整備活動に発展してきたこと  
○活動を通じて、地域の歴史や遺産の再発見がすすんできたこと

### 小泉山の生い立ちと特徴について

地形・地質担当 富樫 均

日本列島中央部には糸魚川-静岡構造線を境に、その東側に列島を分断する大きな陥没帯があります。この目に見えない大陥没帯がフォッサマグナと呼ばれるものです。2500～2000万年前に陥没した時には、フォッサマグナ一帯は海になり、砂や泥などが堆積していきました。そして、今から700万～800万年前に、海にたまった堆積物を貫いて、地下深くからの湧いてきたマグマが小泉山のもとになりました。海底はやがて隆起し、一帯は山になり、ほうほうで火山噴火が起こります。八ヶ岳の火山噴火が始まったのは今から約130万年前で、火山のふもとに人が住むようになったのは約2～3万年前からになります。

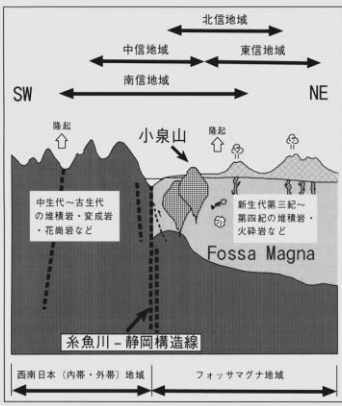


図 小泉山はどこなところか

### 小泉山の雑木林

植物担当：大塚孝一

雑木林：里山にあって、冷温帯ではコナラやクヌギ、暖温帯ではシイやカシ類などのドングリによる広葉樹の二次林で、かつて薪炭林などとして用いられた。スギやヒノキなどの木材用途のための人工林と対比される。雑木林には、クワガタムシやチョウなど身近な昆虫や生物が多い。

小泉山の雑木林：コナラやクリなどの落葉樹林で、ドングリがなる木を主体としている。



小泉山のコナラ林（どのように成立したか？）  
かつて薪炭林であった雑木林（長野市）  
アカマツ林  
カラマツ林

小泉山に見られる主な樹木：  
針葉樹：アカマツ、カラマツ、サワラ、スギ、ネズミサシ他  
広葉樹：アオハダ、アズキナシ、ウミズギザクラ、オトコヨウゾメ、クサギ、クリ、コシアブラ、コナラ、コバノガマズミ、コブシ、サワフタギ、シナノキ、ソヨゴ（常緑）、ダンコウバイ、フノハシバミ、ツリバナ、ネジキ、ノリウツギ、ハリギリ、ミズキ、ミズナラ、ヤマウルシ、ヤマブツジ、ヤマモミジ、リョウヒ他

## 江戸時代の民間信仰について

人文社会担当 畑中健一郎

戦国時代が終わって江戸時代になり社会が安定してくると、講と呼ばれる民間信仰が庶民の間で盛んになってきました。庚申講や伊勢講など種類も数多くあり、一つの村の中にも多くの講ができ、各家は複数の講に参加していました。もともとは信仰的な集まりでしたが、信仰を兼ねて呑み食いをしたり、話しを楽しむ場として、また自由に旅行ができなかった時代にお参りという名目で各地を旅行したりと、講は娯楽機関としても重要な意味をもっていました。小泉山にも信仰的講に関係すると思われる祠などが多く残っています。

### 富士山信仰

富士講は長谷川角行を開祖とする富士山登拝を目的とした講です。食行身祿（じきぎょうみろく）を講祖とする身祿派と村上光清を講祖とする村上派がありました。江戸を中心に、富士山の見える関東一円とその周辺の地域に広まり、化政期には爆発的な隆盛をみました。富士山登拝のほか、浅間塚と呼ばれる人造の富士塚をつくりそこで富士山を遥拝したり、代理登山をしたりしました。富士塚の中腹には小御嶽石尊大権現（こみたけせきそんだいごんげん）を祀る祠を建てたり、身祿入定の場所に石を置いたりして、富士山に似せてつくりました。

食行身祿は伊勢の出身で、江戸に出て商人として成功したのち、財を蓄えることは悪であると感じ、富士行者の弟子となりました。身祿は資産のすべてを使用人や親類に分け与え、油の行商人となり布教に専念しましたが、肌腫のなかで富士山入定を決意し、1733年7月に富士山で31日間の断食行をおこない入定（死）を果たしました。

### 金毘羅信仰

香川県琴平町の金刀比羅宮に対する信仰。明治になるまでは金毘羅大権現と称し、「讃岐の金毘羅さん」の名は全国に知られわたり、多数の金毘羅参りの人々でにぎわいました。航海安全、大漁、豊作、商売繁盛、防火の神として篤く信仰されました。

### 秋葉信仰

静岡県春野町の秋葉山の神に対する信仰。火伏せの神で、明治になるまでは秋葉大権現と称しました。全国にその分社が多く、近世末期には小祠を含めると27000余の分社を数えたといえます。信州、三河、遠江から秋葉山に集まる秋葉街道がよく知られています。

### 愛宕信仰

京都市の愛宕山にある愛宕神社に対する信仰。明治になるまでは愛宕大権現と称しました。愛宕信仰は、火伏せの神、境界を守る蓮の神として広く信仰されています。関西では愛宕講を組織して、今日でも代参を行なっている村も多いようです。愛宕という名を有する社は、和歌山県・愛媛県・熊本県・沖縄県を除く43都道府県に分布しており、その総数は小社まで含めれば1500社を超えるといわれています。

### 御嶽信仰

御嶽講は木曾の御嶽山を信仰し登拝を行う講のことです。全国各地に散在し、幕末には大小500を越す数となりました。現在では、「御嶽」というと木曾の御嶽を思い浮かべますが、もともとは吉野の金の御嶽（カネノミタケ、金峰山）をさしていました。そしてこの金峰山の本尊である蔵王権現を勧請した各地の霊山も御嶽（ミタケ）と呼ばれるようになり、武州御嶽、甲府御嶽など全国に広まりましたが、木曾の御嶽だけがオンタケと呼ばれています。

## 「火とぼし」について

小泉山と大泉山の山腹に祭られた愛宕神社、秋葉神社、金毘羅神社などの前で、6月18日と24日の夜におこなわれる火祭り行事。小学校1年生から中学校1年生までの男子によって行われ、大人は参加しません。神社の前で作った3本の松の木を組んだ高さ3メートルもある小屋に火をつけ、「火とぼしチヨイチヨイ」と呼び合って氣勢をあげます。豊作祈願、虫追い、雨乞い、火伏せなど起源については諸説ありますが定かではありません。

### おもな参考文献

- ・ 日本歴史大事典、小学館、2000年
- ・ 山岳宗教史研究叢書9 富士・御嶽と中部霊山、名著出版、1978年
- ・ 愛宕山と愛宕信仰、サンケイ文化センター・HP
- ・ 民衆宗教史叢書第6巻 御嶽信仰、雄山閣出版、1985年
- ・ 信濃教育1099号、1978年